【その他】

がんばれ森林遺伝育種学会

井出　雄二 *, 1

森林遺伝育種学会は本年 3 月で設立から満 6 年を迎えました。設立にかかわったものの一人として大変感慨深いものがあります。設立の呼びかけに賛同してくださった多数の皆様、設立に向けて実質的に活動してくださった設立当初の役員の皆様には大変なご尽力をいただき、大変懐かしく、また、感謝に堪えません。大会（研究発表会）の開催、学会誌「森林遺伝育種」の刊行、森林遺伝育種シンポジウムの開催、この三大事業が継続的に実施され、会員の数も当初 100 名もいればと思っていたのに反して今では 150 名超えと、大変素晴らしいです。それぞれをご担当されてきた理事、委員のお骨折りは一方ならぬものがあると存じます。会員としてあらためてお礼申し上げます。また、これには、本学会の設立に際して、解散した林木育種協会からいただいた有形無形のご援助も大きく寄与しており、感謝しなければなりません。

本会の設立目的に、「森林に係わる遺伝と育種の研究発表及び情報交換の場の提供すること。」、「森林・林業分野における森林遺伝育種に関する情報を広く社会に広報して、日本の森林の持続的発展をはかること。」の二つが掲げられています。

前者に関しては、乏しい予算と人員でこれだけの事業を実施できたことは、誇らしいことだと思います。同学の者が安心して集える場として、学会は安定した組織であることが望まれます。これからも、引き続きこれらの事業を大切に運営していただけるよう願っています。会員の皆様には、大会やシンポジウムへの参加はもとより、学会誌への積極的な投稿を期待します。また、学会誌はその学会がどのような方向を持って活動しているかを世の中に知らせるための窓のようなものです。大会における研究発表は、意見交換の場としては意味があるのですが、学会誌への発表は、広く成果を社会へ発信するという意味で大変重要と思います。これまでの会誌を見ると原著論文の数が大変少なく、学術雑誌としては不十分ではないかと少し心配になります。会員の皆様には是非積極的な発表をお願いします。「森林遺伝育種」は日本の森林、林業関係の雑誌としては極めて稀なオープンアクセス誌です。ここに掲載するということは、単に専門を同じくする研究者の間で読まれるというだけでなく、この分野に関心を持つ人々への発信にもなるのです。学会としても、より多くの人々に読んでいただけるよう、例えば、他学会のホームページにバナーを掲載してもらうことや関係雑誌に広告を掲載するなど、いろいろな場面で学会誌紹介の努力をしていただければと思います。

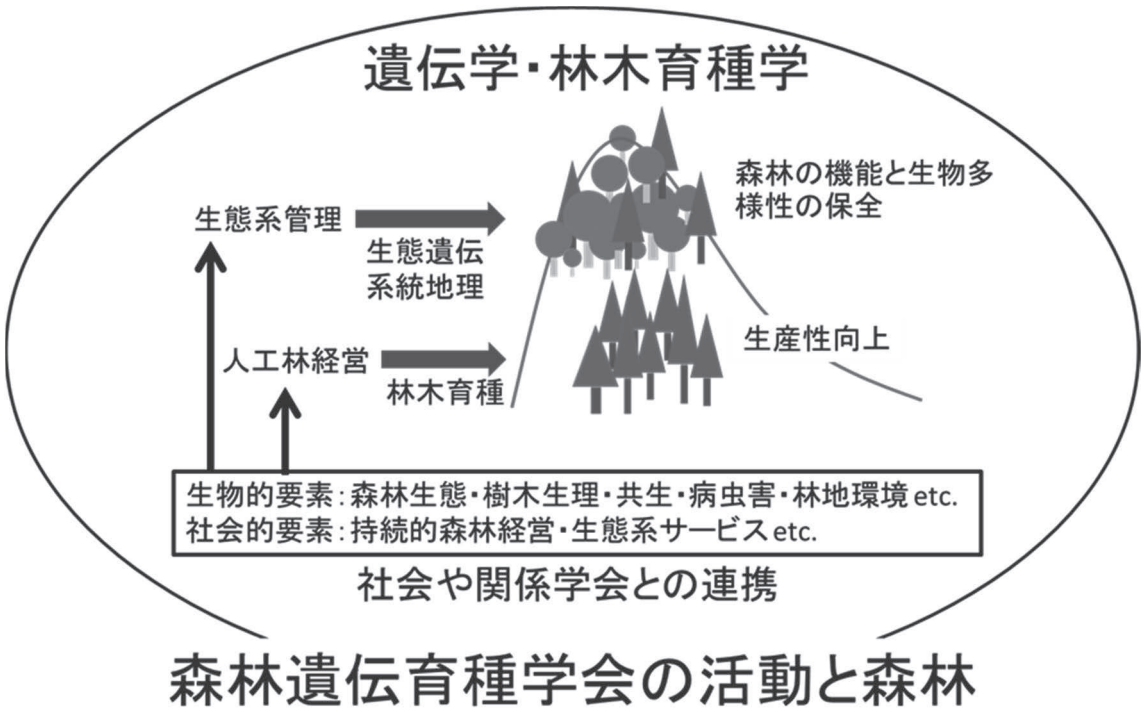
一方、後者に関してはこれまであまり積極的な活動はできていなかったのではないでしょうか。設立間もない学会にとって会の運営を軌道に乗せるだけでも大変なところに、さらに幅広い活動はとても手に負えないかもしれませんが、社会とのつながりなくして研究成果を森林の現場に展開することもかないません。今後は、すこしずつ社会全体へ目を向けた活動もお願いします。私は、昨年まで日本緑化センターが行っている樹木医研修の講師をしていましたが、受講者たちの緑化樹木の種苗移動に関して多くの質問を受けました。この問題が想像以上に関係者に浸透していることを実感するとともに、きちんとした情報伝達を行う必要性も感じました。こんなところにも本会が活動する場があると思います。さらに、協力学術団体（会員数 100 名以上）としての日本学術会議への参画や日本農学会への加盟（会員数 150 名以上）なども視野に入れておく必要があると思います。

さて、このように書いてくると、私たちのような小さな学会に何ができるかと思われるかもしれませんが、私たちには遺伝学という武器があります。また、60 年にわたり蓄えてきた、遺伝資源とそれに関する膨大な情報という資産があります。今日、生物を扱う科学の分野において、遺伝分析は極めて核心的なツールになっています。森林分野でも、生態学はもとより樹病学、生

* E-mail: ide@es.a.u-tokyo.ac.jp
1 いでゆうじ、東京大学大学院農学生命科学研究科

理学など分野を超え、動物、植物、菌類など生物のグループを超えて研究に利用されています。私たち森林遺伝育種学会の会員は、この学会が単に樹木の遺伝と育種に限った活動を目指すのではなく、広く、遺伝というキーワードで森林を俯瞰する学術団体たるべく、自覚し、活動してゆくことが大切だと思います。今は本学会に所属していないけれども、ツールとして遺伝分析を利用している、また、これからの利用を考えている研究者の方々に対しても、積極的な参加を促す必要があります。そうした方たちへの呼びかけとなるよう、学会誌においては、森林の遺伝に関する多様な分野の情報発信を心がけていただきたいと思います。また、この分野で先端的な研究をされている会員の皆様には、ぜひ、分野横断型のプロジェクト研究を立ち上げていただき、さらに幅広い研究者が遺伝の世界と連携できるよう、積極的な取り組みをお願いします。

次に、林木育種における学会の役割について考えてみたいと思います。これからの林木育種は、遺伝的側面から見た森林管理を強く意識したものになると考えています。今日、戦後植林された林分が伐期を迎え、国産材を利用しようという機運が高まっています。それをうまく持続的林業の確立に結び付けられるかが、林業の活性化において大きな課題となっています。それを種苗の面から支えるのが林木育種ですが、こうした時代においては、林木育種が単なる育種種苗の作出にとどまっていては十分な役割は果たせません。これからは、優良な系統の作出とそれを林木として育成される技術の両方が求められるので、林木育種は植栽、保育、収穫のすべてにかかわる総合的な仕事にならざるを得ません。農業における品種作出は、新品種を作り上げると同時に、それを使った栽培の体系から農家経営のありかたまでをパッケージにしたものとして提案されます。林業が成長産業化するということは、しっかりした経営理念のもとに種苗選択から育林、木材利用までが一続きになった、経営体系が求められるということではないでしょうか。すでにエリートツリーの普及においては、育苗から適地選択など幅広い検討が行われており、こうした傾向を先取りしているともいえます。このように、林木育種は単に遺伝的な知見に基づく種苗管理だけでなく、これからは総合的な林業技術という側面を持つことになりますので、当然ながら森林遺伝育種学会も種苗や森林の遺伝的管理を中心に置きながらも、林業全般を取り扱う学術団体となってゆくことでしょう。また、こうした高度な林業経営の外に置かれる森林についても、健全な生態系としての森林の持続が求められ、そこにおいても、会員の持つ森林遺伝に関する知識が重要な役割を果たすことになります。蛇足ながら、私の思い描く森林遺伝育種学会の活動について図−1 に



図−1　これからの森林遺伝育種学会のあるべき姿

示しておきます。

最後に、本学会の売りを考えてみたいと思います。それは、なにより手作りの温かさがあるということではないでしょうか。懇親会付きの研究発表会も一つのスタイルとして定着した感があります。今後発表件数が増加すると難しいかもしれませんが、あの雰囲気は大切にしたいものです。また、学会誌の記事は、森林の遺伝と育種を幅広く網羅し、それぞれの記事が会員の研鑽のために役立つ内容であることはもちろん、それぞれの会員がどのようなことを目指しているのかについても理解できるものとなっています。また、「会員だより」も、立場を超えて会員を結びつける場として有益であり、こうした記事が掲載される学会誌は今では少なく貴重です。遺伝育種の分野の研究技術の進歩は著しいものがあります、先端的な研究を森林・林業の現場へ結びつけるための有益な情報を私たちの学会は発信できるはずです。先ほど原著論文が少ないと苦言を呈しましたが、会員相互の連携の中で一つでも多くの論文が掲載されるよう願ってやみません。

編集委員長の戸丸先生から、退職にあたって何か学会へメッセージを寄せるようにとのご依頼がありましたので、これまでの会誌をめくりながら雑多なことを取り留めもなく書き連ねました。今後も森林遺伝育種学会が我が国の森林・林業の現場において遺伝育種の成果を生かしてゆくための中核学会として発展することを祈って筆をおきたいと思います。